

星川啓慈著

『宗教哲学論考』

——ウイトゲンシュタイン・
脳科学・シュツツ——

明石書店 二〇一七年三月刊
四六判 三八二頁 三三〇〇円＋税

杉村 靖彦

一 星川宗教哲学と本書の性格について

星川啓慈氏は、日本宗教学会賞を受賞した第一作の『ウイトゲンシュタインと宗教哲学』（一九八九年）以来、ウイトゲンシュタインを核とする分析哲学系の宗教哲学を一方に置き、それ以前から関心を寄せていたシュツツの日常生活世界の現象学を他方において、心理学、精神医学、脳神経科学、戦争学など、多種多様な分野を精力的に渉猟しながら、余人には真似のできない独創的な業績を積み重ねてきた。その中で、氏は自らの先鋭的で学際的な研究を、一貫して「宗教哲学」の名で呼んでいた。本書は、そのような著者が、『言語ゲームとしての宗教』（一九九七年）、「宗教と〈他〉なるもの」（二〇一一年）とあわせて、『宗教哲学三部作』の最後を飾るものとして刊行したものである。

大変残念なことに、本書の「あとがき」で、著者は、眼のご病気が理由で、おそらくこれが最後の著作になるだろうと告げ

ておられる。そのため本書は、星川宗教哲学の総決算の書という性格を色濃く帯びている。実際「まえがき」では、著者が実践してきた宗教哲学が、「わが国における『宗教哲学の主流』」とは異なる道を進んできたものであることが、著者らしい明快で率直な調子で述べられている。大思想家の重要著作を深く読みこみ、宗教の本質や意義を哲学的に考察して、その成果を体系へと仕上げていくような思索が、著者のイメージする一般的な宗教哲学の姿である。それに対して、著者は本質を語り、体系を追求するような思索の仕方をきっぱりと拒否する。著者の宗教への関心は、「人間の営み」としてのその反本質的な多種多様性に向けられており、著者のいう宗教哲学とは、「理性的な思索を重視する哲学と共同」しつつ、この多種多様性にふさわしい種々の観点からのアプローチを重ねながら、「宗教をめぐって融通無碍に思索を展開する」（一五頁）反体系的な「活動」を意味するのである。

このような著者の姿勢が、「語りえないもの」については沈黙しなければならない」という『論理哲学論考』末尾のテーゼから後期の言語ゲーム論へと向かうウイトゲンシュタインの思索と、日常生活世界の多元的リアリティを「複定立的」な仕方では照らし出すシュツツの現象学を二本の軸としていることはいうまでもない。本書の副題に二人の名が登場するゆえである。しかし、著者の関心事は、もちろん二人の思索を単に相対することではなく、二人の教えを最大限に活用して、宗教という根本的に多面的で、体系的な把握に限界を突きつける事象へと縦横無尽に切りこんでいくことである。この「活動」の成否は、

「ほかの人のものとは違う種々の観点から問題に切り込む」（一五頁）という、分野横断的な探究の敏捷さにかかっている。本書の論述は、二人の名を冠した第一部と第三部はもとより、脳神経科学と宗教哲学の関係を探る第二部も含めて、どこを取っても、異種の分野の間を自在に飛びまわる著者の思索の躍動を感じさせるものとなっている。大家が自らの歩みを総括する著作というのは、重厚ではあっても、出来上がった思索を反芻するだけの鈍重なものになりがちだが、本書はそうした傾向とは全く無縁である。著者はいよいよ若々しく、次々と斬新な観点を取り、新奇で刺激的な考察を繰り出してくる。

二 本書の内容

いま述べたような本書の性格が伝わるように、本書の内容を、あくまで評者の視点からではあるが、順次たどっていくことにしよう。

第一部「ウイトゲンシュタインの生と哲学」は、この哲学者の言語と論理をめぐる極限的な思索の背後に「宗教者」としての姿を透かし見ようとする著者年来の研究方向を、新たな材料を用いてさらに生彩豊かに展開したものである。

二〇世紀の終わりになって、ウイトゲンシュタインが第一次大戦に従軍しつつ『論理哲学論考』（以下『論考』と略す）に結実する考察を進めていた時期の『秘密の日記』と、『論考』の立場を否定し『哲学探究』へと向かう時期の『哲学宗教日記』が刊行された。これらの私的な記録は、言語と論理の極限で「語りえないもの」に触れるウイトゲンシュタインの思索が、

自己の御しがたさに苦しみ神を呼び求めるその「宗教的」生とどれほど緊密に結びついていたかを物語るものであった。著者はこの新資料を徹底的に活用して、ウイトゲンシュタイン像の大胆な描き直しを図る。その白眉は、「独創的な『否定神学』の著作」としての『論考』の姿を浮かび上がらせる長大な第二章である。著者は、『秘密の日記』と同じノットに書かれた『草稿一九四一—一九一六』の草稿をベルゲン大学のウイトゲンシュタイン・アーカイブにまで赴いて閲覧し、重大な発見をする。この発見を『秘密の日記』の叙述と結びつけることで、著者は『論考』の最後のわずかな文言の背後に動く哲学者の生の希求を再構成し、それをこれらの文言の踏みこんだ解釈へとフィードバックさせるのである。

とはいえ、著者のアプローチは単なる文献学的な証拠探しではない。『秘密の日記』の断片的な文章を、著者はそれが書かれた時期の第一次大戦の東部戦線の戦況と結びつけて読み、それがウイトゲンシュタインの心の懊悩と「神への祈り」にどう反映し、『論考』の最後部に当たる進行中の彼の思索とどう連動しているかを大胆に想像する。「私見」や「推測」と断りつつも、この種の解釈を重ねることによって、著者はウイトゲンシュタインが公には「沈黙」しているはずの領域が彼にとつて最も重要な問題であることを確認し、この奥行きも含めて、『論考』の「否定神学」の書としての有りようを改めて証示しようとするのである。

こうしたアプローチは、第一章と第三章ではさらに大胆な形をとる。ここでの考察のベースにあるのは、ウイトゲンシュタ

インがたびたび滞在して重要な仕事を行ったノルウェーのシヨルデンの山小屋を、著者が二〇一四年に訪れた際の印象である。「ほぼ垂直に切り立った崖の上」(五三頁)に立った小屋の超絶的なたずまいから、著者はさまざまに連想をめぐらせていく。そうして、統合失調症と垂直上昇志向を結びつけた中井久夫の精神医学的なウイトゲンシュタイン論からも触発されつつ、そこに「論考」という「梯子」を登って「高み」に立ち、「語りえない宗教の高みから、語りうる事実の世界を見下ろした」(五五頁)。ウイトゲンシュタインの姿を重ねる。また、『哲学宗教日記』には冬に太陽を待ち焦がれる思いをつづった一連の箇所があるが、著者は小屋跡から南空を望みつつこの箇所を読み直して、春の太陽の暖かな陽射しがウイトゲンシュタインをある種の「宗教的境地」へと導き、その精神を回復させたのだと考える。そこから著者は、ノルウェーの画家ムンクにおける太陽と統合失調症の関係、さらには人類の原初以来の太陽と宗教の関係へと、思索をエスカレートさせていく。こうした破天荒でさえある論法によって、ウイトゲンシュタインの哲学者としての「沈黙」を突き抜け、「人間ウイトゲンシュタイン」(二八頁)とその人格が体現する独自な宗教性に迫ろうとするのである。

第二部は「宗教と神経科学」と題され、一転して、近年目覚ましい発展を遂げつつある脳神経科学と心や宗教の問題との関係が論じられる。だが、異種の観点を自在に飛び移り、「人間の事柄としての宗教に生き生きとした関心を寄せ、新たな事象につねに自らを開いておく」という著者の思考態度には変わりがない。

これは、先のウイトゲンシュタインの場合と同様、「人間」リベットとその宗教性への著者の鋭い関心のゆえであらう。とはいえ、著者は単に一人の人間の内で宗教と科学を棲み分けさせて済ませようというのではない。リベットの矛盾は、「自由意志の擁護は科学的に実証されねばならない」という命題自体の限定性を問い直させ、「科学的」「決定論」と宗教的「自由論」の狭間」(二〇頁)でこの問題を新たに思索するよう促すのではない。著者はそこに意味を見出しているのである。

実際、続く第五章では、この「狭間」をめぐるもう一步踏みこんだ考察が、エグルズとボバーの共著『自我と脳』(一九七七)を導きとして展開されていく。著者が一方で今日の脳神経科学の進展によく目配りしながら、他方でこの古典的著作に手がかりを求めるのは、この著作のスケールの大きさもさることながら、その「心脳相互作用論」に宗教哲学的な可能性を見出しているからである。今日の脳神経科学は、おおむね心や意識を脳内過程に還元する物理主義的一元論を取っているが、脳内過程を記述する言語が「三人称」であるのに対し、宗教体験の世界は「一人称」で記述される限りに対し、両者は断絶したままであると著者はいう。近年の脳神経科学の進歩は、宗教体験を重視する宗教哲学にとっては脅威に映るが、この断絶がある限り「宗教体験は脳科学からの侵食を受けない」(二五七頁)のである。

しかし、断絶があるというのは、「両者の建設的な関係は生まれてこない」(二五七頁)ということでもある。それでよいのか、というのが著者の問いかけである。ボバーの三世界論や

ない。

第4章では、自由意志の存在をめぐる有名な実験を行った神経生理学者リベットが取り上げられる。「自由意志は無意識的な脳活動の後から生じる」というリベットの実験は、多くの分野の研究者の関心を引き、とくに自然主義的傾向の強い研究者たちは、これを自由意志の存在を否定する強力な証拠とみなした。だが、リベット自身も、何かをしようとする意志の自由はこうして否定されるとしても、行為が生成する過程を妨げ「拒否(rejection)」するという形での自由意志は温存されるという。理屈で考えれば、この拒否する意志にも先行する無意識の脳内過程があるかどうかが問題にされるべきだろう。だが、リベットはそれを調べる実験を企てることなく、拒否する意志は「先行する無意識の過程を必要としないし、その直接的な結果でもない」と断言する(二二二頁)。そして、そう考えなければ、「世界中の多くの宗教によっても支持されてきた」ような「人間の自発的な行為に対する個人の責任についての倫理観」が保持し難くなる、と主張するのである(二二七頁)。

以上のようにまとめた上で、著者はそこに、リベットが傾倒するユダヤ教の宗教的信念の介入を見る。実験を心や意識の問題に適用することの意義を謳いあげるリベットが、宗教的信念から自由意志を死守しようとしているとすれば、それは明らかに矛盾であらう。こうした場合、人は通常、どのような立場を取るにせよ、ともかく矛盾を難し、矛盾を解消しようとするものである。だが、著者は「このこと自体は決して悪いこと／否定されるべきことではない」(二二七頁)という。おそらくそ

エグルズの連絡脳説を踏み台にしながら、著者は「脳／脳内過程を視野に入れた宗教哲学」『神経宗教哲学』(二八八頁)を構想していかなければならないという。そのための軸になるのが、「宗教と脳を結びつけるのは自律した言語である」(二八九頁)という着想である。一人称言語と三人称言語を架橋する共通要素として、著者は「記述」や「論証」の機能について言及してはいるが、この「自律した言語」をどのように考えていけばよいかはまだまだほとんど述べられていない。だが、このような形で「神経宗教哲学」を構想すること自体、新たな問題状況にいち早く応答し、自らの研究に新たな観点を加えていく著者の学問の敏捷性を示している。著者の面目躍如であるといえよう。

最後の第三部は「祈りの分析」と題され、シュッツを論じた第六章が配されている。著者の研究活動の原点となったシュッツが、この総括の書の終章に登場するわけである。章末に用語解説まで付けられており、著者の思い入れの深さが伺えるが、もちろん単なるシュッツのモノグラフィではない。著者は自らが宗教現象の「核心」と見なす「祈り」の有りようについて、ウイトゲンシュタイン由来の分析言語哲学とシュッツの日常生活世界の現象学を結びつけて考察してみせる。前者の言語ゲーム論と言語行為論は、祈りという営みが、単に「神が存在する」という事実確認的な言明ではなく、「自己関与をともなした一種の行為遂行的行動」(三三三頁)であり、一群の特有な規則に従う「神への傾倒に基礎をおいた宗教的言語ゲーム」(三三七頁)であることを示している。その限りに対して、祈

りには根拠づけや基礎づけは無用であり、「われわれはまさにこのように行動するのだ」（三四一頁）という行為のみを根拠とするのである。

とはいえ、これは折りが世界のリアリティと無関係だということではない。ここでもちだされるのが「多元的リアリティ」の構成をめぐるシュッツの考察である。シュッツの現象学はわれわれの体験の「複定立的」な構成を浮き彫りにするが、折りはすぐれて複定立的な現象である。すなわち、それは日常生活世界のただ中にあたかも「飛び地」のように他のリアリティを現出させ、そこから日常生活世界を別の光の下で照らし出す「象徴的間接提示」作用なのである。ここにおいて、日常生活世界における体験の水平的構造は「所与の垂直的上昇様式」（三四七頁）へと変容する。おそらく、このように言語行為と世界経験が重なり合う所で生起する「垂直的上昇」こそが、著者がワイトゲンシュタインの生に見てとった姿であり、また著者の神経宗教哲学の構想をひそかに支えるヴィジョンなのだろう。

三 コメント

以上、雑駁ではあるが、本書の内容を評者なりの仕方一通り紹介してきた。これまでの星川氏の著作と同様、個性的で魅力的な著作であることは間違いない。評者の理が勝ちすぎるまゝとめ方が、著者の論展開の軽やかな疾走感を損なっていないことを望むばかりである。もちろん、本書を彩る数々のユニークな考察に対して異論がないわけではない。著者自身のいわば

「シヨルデン体験」からワイトゲンシュタインの内面にぐいぐい入っていく第一部の論述は、読み物としては面白くても、検証しようがなく危なっかしい面があるように思われたし、第二部の神経宗教哲学構想にしても、「言語の自律性」を語るだけではまだ何も言ったことにならないように思う。さまざまな観点から次々と斬新なアイデアをうち出す本書には、どこか無防備なところがあり、隙の多い著作だとさえいえる。しかし、その分、批判に備えて予防線を張り巡らせるような論考にはない創造性があり、議論を喚起する起爆力をもっている。これは著者の書くもののひとつ美德であろう。

そのことを認めた上で、最後に一つ、評者自身の学問的関心から問いを投げかけておきたい。星川氏は自身の立場を「宗教哲学」と規定しておられる。それが宗教を本質化したり体系的な思索を志向したりせず、「人間の営み」として多種多様な宗教を「人間学的に」研究する立場であることは、本書の「まえがき」で記された通りである。そのように性格づけるならば、著者の独特な仕事は、「人間学」としての宗教学というわが国の宗教学研究の強力な潮流の一つに、想像以上に深く根差していることが見てくるようにも思われる。だがその場合、宗教哲学という際の「哲学」はどうなるのだろうか。

著者は「人間ワイトゲンシュタイン」という。そして、彼の私的な日記で宗教的な語彙を用いて表現される内心の懊悩へと深い関心を寄せる。しかし、私的な日記においてさえ、この「人間」は第一義的には「哲学者」である。日記の中で繰り返して噴出する自己告白と救済への強迫的な衝動は、哲学者として

の「仕事」（『秘密の日記』）への打ちこみようと一体になっている。自己の高ぶりの「罪」から「信仰」による「あるがままの自己の宗教」への到達という、『宗教哲学日記』の描く「回心」の軌跡においては、『論考』自体がワイトゲンシュタインの「原罪」であり、『哲学探究』の新たな立場がその回心の果実なのである。ここから透かし見られるのは、誤解を恐れずに言えば、真理を求めてやまない哲学そのものの「宗教性」であり、この「宗教性」と実定的な（この場合はキリスト教の）宗教性とは交差し混じり合い、異形の思索が立ち上がってくるさまである。ワイトゲンシュタインの「宗教性」がこのような「哲学」のあり方と一体であったからこそ、彼は世界全体を要素命題の集合で写し取ろうとする『論考』の立場の理論的誤りを、自らの根本精神における罪として受けとめて懊悩し、その罪からの回心後の反哲学的な新境地をなお『哲学探究』として表現しなければならなかったのではないか。基礎づけ主義の徹底的な断念自体、究極的な真理は存在しないという事態すらをも、その「真理性」をそれにふさわしい言語と論理で語ることを求めてやまないこの徹底性が、ワイトゲンシュタインの「生」を張り詰めたものになっている。哲学の宿疾ともいうべきこの執拗な反復的探究（それは必ずしも本質主義や体系構築という姿を取らない）に対して、種々の立場を軽快に遊動する著者の「人間学」は淡泊でありすぎるように思われる。著者は「哲学」をどのように考えているのか。著者にとって、哲学とは種々の「理性的な思索を重視する」立場の一つに過ぎないものなのだろうか。あるいは、このように問いかけること自体、評者がな

お本質主義的な哲学観にとらわれていることを示しているのだろうか。

注

(1) この点については、『哲学宗教日記』の訳者鬼界彰夫による透徹した「訳者解説」を参照されたい（イルゼ・ゾマヴィラ編、鬼界彰夫訳『ワイトゲンシュタイン哲学宗教日記 1930-1932/1936-1937』講談社、二〇〇五年）。

宗教研究

第 92 卷 391 第 1 輯

論 文

井関 大介：熊沢蕃山の「大道」と「神道」	1
権 東祐：教派神道の朝鮮布教からみる近代神道の様相	27
飯島 孝良：市川白弦における「即」の論理	53
浦井 聡：無宗教者の「救済」？	79
高橋 駿仁：啓蒙の神話学	105
高山 善光：宗教的な宗教現象と世俗的な宗教現象のあいだ	131

書評と紹介

久保田 浩：華園聰庵著「宗教現象学入門」	157
杉村 靖彦：尾川啓慈著「宗教哲学論考」	164
川田 牧人：江川純一・久保田浩編「『呪術』の呪縛」上巻・下巻	170
土居 浩：村上晶著「巫者のいる日常」	181
前川 健一：松尾剛次著「中世叙尊教団の全国的展開」	186
長谷千代子：エリック・シッケタンツ著「墮落と復興の近代中国仏教」	189
櫻井 義秀：矢野秀武著「国家と上座仏教」	193
伊達 聖伸：藤原聖子著「ポスト多文化主義教育が描く宗教」	200
高井 啓介：渡辺和子著「エサルハドン王位継承誓約文書」	205
津田 謙治：中西恭子著「ユリアヌスの信仰世界」	212

日本宗教学会

2018年6月